平成２４年度第３回川崎市政策評価委員会　摘録

１　開催日時　平成２４年１１月１６日（金）午後３時００分～４時１５分
２　開催場所　明治安田生命川崎ビル　２階　第２会議室
３　出 席 者　委員　　高千穂委員長、垣内副委員長、生駒委員、川崎委員、野口委員、
安陪委員、長尾委員、松田委員
事務局　総合企画局都市経営部　金子部長
総合企画局都市経営部企画調整課　高橋担当課長
財政局財政部財政課　斎藤担当課長
総合企画局都市経営部企画調整課
岸担当課長、鈴木担当係長、青木職員

４　議　事
（１）市民意見募集の結果について（報告）
（２）政策評価委員会の改善意見等を踏まえた市の対応の検討状況について（中間報告）
（３）平成２４年度施策評価の検証等について（案）
（４）その他（スケジュール等）
５　傍聴者　なし
６　会議内容

議事（１）市民意見募集の結果について（報告）

高千穂委員長）事務局の説明に対して、御質問、御意見等があればお願いしたい。

長尾委員）周知方法の案内チラシはどのようなものか。

岸担当課長）チラシはＡ４の大きさで、表面に大きく意見募集と記載されている。裏面はコメントが書けるような様式になっている。そこに意見を記載して、FAXで送ったり、区役所に提出したりできるような様式となっている。
　ポスターについては、倍のＡ３の大きさで作成し、市の広報掲示板に掲示を行った。

松田委員）前回の委員会で周知方法についていろいろお願いしていた。それを受けて、今回はまちづくり推進協議会などの各区の住民参加型会議で意見募集の周知を行ってくれている。市民一人一人に直接周知するのは難しいが、このような行政と近い立場にいる住民の代表を通じてでも、市の政策のプロセスや進捗状況などを周知することは大変良いことだと思う。今後とも、このようなかたちでもよいので、市民への周知について努力していってほしい。

生駒委員）まちづくり推進協議会や住民参加型会議での周知方法について聞かせてほしい。会議の場で施策の概要等を説明して意見をもらっているのか、それとも意見募集をしているホームページの案内等をした程度なのか。

岸担当課長）第３期実行計画平成２３年度実施結果の冊子をもとに、評価票の中身に踏み込んで説明を行った。会議が行われている区に関係の深い施策課題を選んで説明し、意見募集を行った。さきほどお示しした、政策評価に関する意見についても、この会議の中で出たものが含まれている。

毎年意見を募集しているが、過去の結果を見ても、内容が複雑なこともあり、５から１０件程度しか意見が出てこない状況であった。今回、区役所にも協力してもらい、会議に参加して説明をしたことで、参加者の中から意見をもらえたので、この取組については効果があったと実感している。

生駒委員）意見募集を行った会議は何回程度か。

岸担当課長）５つの区役所で９回の会議に出席した。

議事（２）政策評価委員会の改善意見等を踏まえた市の対応の検討状況について（中間報告）

高千穂委員長）事務局の説明に対して、御質問、御意見等があればお願いしたい。

松田委員）「参考指標の妥当性」については指摘が多かったところだが、今回、「対応が難しいもの」の中で比率が一番高いのが「参考指標の妥当性」となっている。私がなぜ指摘したかというと、文字だけでは分かりにくい部分があり、数字で示すことでより市民に分かりやすいものになるからである。それに対して、対応は困難という回答ばかりとなっている。困難なのはわかるが、困難というからには別の角度からの提案などを行っていかないと、いつまでたっても市民に対して具体的な数値を示して理解してもらうことができない。住民の増加数や対前年度比較などの指標を示すことで、市民の方々に、政策に対する納得感や親近感をもってもらうことができるもの、それが参考指標だと思う。

安陪委員）確かに、対応困難の中には、実数の把握や完成時期の明記が 1 年間のスパンでは難しいものもあると思うが、現場の周りの状況を加味した説明を入れれば、参考指標を設定しにくい理由が分かる。周りの状況が把握できるようなヒントとなる回答でもよいと思う。

川崎委員）市民に向けた説明というより、議会答弁を見ているような印象を持った。

事業とその成果は必ずしも１対１である必要はないということを、この委員会でもずっと言ってきたと思うが、現在掲げられているもの以外で、他に指標となり得るものもいくつかあると感じている。たとえば、失業率については川崎市に統計がないとあるが、有効求人倍率でもよいのではないかと思う。市民にとっては、どこの行政機関がやっても成果は変わらないわけであり、そこを意識した指標に改良してほしい。

高千穂委員長）一委員としての意見であるが、そもそも事業評価と施策評価、または政策評価、これらは別物だから、施策評価において個別の事業を見てもしょうがない、という意識があるとすれば、それは違うと思う。ある施策を行うときに鍵となる施策や事業が当然ある。それを施策評価の、いわば「代理変数」として使うことはあっていいと思う。その辺は柔軟に考えられるとよい。

　また、参考指標については、その施策を市民が見たときに直感的にわかるようなことを書けばよいということにして、あまり指標イコール数字ということにこだわりすぎない方がよい。

議事（３）平成２４年度施策評価の検証等について（案）

高千穂委員長）事務局の説明に対して、御質問、御意見等があればお願いしたい。

川崎委員）評価する側にとっては、このようなやり方の方が分かりやすく、評価しやすくなっていると思うが、事業局が評価票を記載する際に、この「施策進行管理・評価チェックシート」の基準に則って記載できるのかを試してほしい。

　また、点数を付ける評価方法にした場合、「検証項目」毎の総合評価として、点数表記ではなく、わざわざ「良」、「可」、「要改善」の３段階評価にする意味は何か。

岸担当課長）「良」、「可」、「要改善」については、これまでも、継続して３段階評価で行ってきたので、比較検討する上では３段階評価の方がよいと考えている。

長尾委員）３つある「着眼点」の中で、１つ目が満点の「２」で、他の２つが「０」なら、その評価は「要改善」となる。ただ、１つ目の「着眼点」だけを見れば、満点をとっているので改善する必要はない。こういう場合、どの部分の改善が必要かを事業局に伝えないと意味がないが、各委員が付けた「着眼点」毎の点数については事業局に伝わるのか。

岸担当課長）事業局に各委員の判定結果を通知する際には、その判定のもととなる点数の内訳も示し、どこが足りない部分かを伝えて、対応してもらうようにし

たい。

長尾委員）チェックポイント③について、残された課題がない場合は空欄ということもあると書いてある。空欄ということは「２」ということでよいか。

岸担当課長）空欄の場合、全体の内容を読んで新たな課題はないと判断できれば、「２」となる。

今後、それぞれの着眼点ごとに「０」、「１」、「２」の参考例を示したい。それを見て各委員にイメージしてもらい、点数を付けてもらいたい。

野口委員）２人の委員から評価が示されることになるが、それぞれの評価を平均してしまうのか、それとも別々に併記するのか。

岸担当課長）これまでどおり、２人の評価を併記する。

川崎委員）「０」、「１」、「２」については、事例というよりも基準をはっきりさせた方がよい。「０」は「明らかに誤解を与える」、または「何も説明がされていない」、「１」は「分かる」、「２」については「具体的に説明がされている」、くらいにしておいた方がよいのではないか。

また、３段階評価は「１」、「２」、「３」とした方が印象の面からよいかもしれない。

生駒委員）私からは３点ある。１つ目としては、確かに、以前のように「着眼点」が複数例挙されているものを横目で眺めつつ総合的に判定するよりも、分かりやすいと思う。ただ、今回の評価方法では、これまで総合的に判定していたものを細分化して判定しなければならず、それはそれで煩雑である気はする。長尾委員や川崎委員から指摘があったように、評価基準を明確化すればやりやすくなると思う。

２つ目として、３つの着眼点をそれぞれ「０」、「１」、「２」で評価した場合、合計点は「０～６」の７段階となる。それを「良」「可」「要改善」の３段階判定に当てはめる際、下から「０、１、２」、「３、４」、「５、６」という３・２・２に区分けすると、「０、１、２」が集合としては大きくなるため、理屈のうえでは「要改善」に入ることが多くなる可能性があるが、それでよいのか。

３つ目に、「チェックポイント」に対して複数設定されている「着眼点」について、全て同じウエイトで評価してよいのかという論点がある。着眼点のなかには、必須で満たさなければならない重要な着眼点と、必須ではないが満たしていることが望ましい着眼点とがあるのではないか。ある１つの重要

な「着眼点」において落第点を取った場合、その「チェックポイント」については、他の着眼点の点数が高くとも「要改善」となるような評価の仕組みを作る必要性があるのではないか。たとえば、「成果説明の妥当性」の「着眼点」に「全体を網羅した説明になっているか」という項目があるが、この着眼点の点数が充分でなければ、評価の結果は「要改善」とするべきである。しかし、その他の着眼点の点数が良かった場合、結果的に「良」となることもある。本当にそれでよいのか。もし落第点を付けるようなポイントがあるのであれば、検討した方がよい。

岸担当課長）「０～６」の７段階について、何点ごとに「良」「可」「要改善」に当てはめるかについては、事業局に改善の意識を持たせる必要から、どちらかといえば厳しめの判定が出るように、基準を設けることを考えている。また、ウエイトの件については、事前説明の際に高千穂委員長からも指摘を受けたところである。確かに、明らかに重要なポイントがあれば、ウエイトに差を付けることはできる。しかし、ウエイトの置き方は各人の見方によって異なるし、その調整まで考えるとかなり複雑化してしまう。我々にとっては、分かりやすさは重要な視点である。いくらしっかりした目標表現がされていても、専門用語を多用して相手に伝わらないものになっている場合は「０」となる。このように、見方によっては甲乙付け難いものであるので、今回はウエイトに差を付けずにやってみたいと思っている。

生駒委員）了解した。現実的には、重要な着眼点で落第点が付いたものは、おそらく他の着眼点も充分な記載はできていないはずなので、結果的には「要改善」になるとは思う。理屈上はこのような考え方もあるということである。

川崎委員）私もウエイトについて考えてみたが、やはり複雑になるので、軽重をつけない方が見やすいと思った。もし、気になる部分があるのであれば、コメント欄に記載すればよい。

松田委員）個別の評価を積み上げた結果、合格点になったとしても、総合的に判断すると合格点に満たないというギャップが往々にしてある。確かに、個別の評価を積み上げた結果が総合評価となる仕組みは分かりやすいし、印象も違ってくる。前回は最終的には総合的な判断で評価を行なっており、それが市民と専門家の先生方の見方の違いとしいて現れた。だからといって点数の積み上げだけでそれが解消するとも思えない。このあたりについては、マニュアルで調整してもらいたい。

岸担当課長）点数で表せない部分については、コメント欄に記載し、事業局に伝えて

いくことで対応できるのではないかと考えている。委員には同じ考え方で評価を行ってもらう必要があるので、マニュアルに記載しておく。

垣内副委員長）個別の評価については、基本的には今まで頭の中でやっていたことを見える化したものである捉えている。非常に分かりやすくなったと思う。ただ一方で、総合評価の方法が変わるので、今コンセンサスが得られているものについては、マニュアルに反映してほしい。

点数の付け方については、３段階評価がよいと思う。目標をクリアできていれば「１」、そうでない場合は「０」で、「１」よりはるかにうまくできている場合は「２」という判断基準となるので、非常に分かりやすくなると思う。我々が評価をしている意味として重要なのは、１つは市民に対して結果を示すということであるが、もう一つは事業局の職員に、どこが悪くて何を改善するべきかがより分かりやすくなることであると考えている。私としては「１」を標準とする評価がよいと思うが、もしこの会議でコンセンサスを得られるのであれば、このことをマニュアルに記載してほしい。

「参考指標の妥当性」に対する各委員からの意見について、対応が難しいという回答が大半を占めているということを考えたときに、マニュアルにある参考指標の説明をより詳しくした方がよいのではないかと思った。参考指標というと、まず主要な取組に直接関係のあるものだけと読めてしまうので、それ以外の周辺部分のデータで、必ずしも主要な取組に直接関連するようなものでなくても、その背景にあるものであれば参考指標として認めるといったようなことなども、マニュアルに明示した方がよい。

岸担当課長）了解した。

川崎委員）チェックポイント①や②について、１～２つ目の「着眼点」が「２」であれば、３つ目の着眼点も自動的に「２」になるのではないか。別の言い方をすれば、３つ目は独立した「着眼点」ではなく、他の「着眼点」の尺度ではないかと感じる。

岸担当課長）３つ目の「着眼点」の「分かりやすいか」とは、専門用語に対する説明などを十分に行っているかという観点であり、妥当性や関連性と区別した。ただ、目標が目標となっていて、関連性も取れていれば、その記載こそが分かりやすさに繋がるという考え方も確かにある。

長尾委員）「着眼点」の書きぶりが、もう少し絞り込まれないと、この点数配分にすることの意味が薄れてしまうのではないか。「着眼点」が着眼点でなくなってしまうと、本末転倒である。

「着眼点」がしっかり精査できたとすれば、それぞれに点数を付けることができるが、最終的な判定は必要となるのか。「良」、「可」、「要改善」で判定する意味が感じられない。

川崎委員）全体の評価を３段階で行うことについては、事務局からも説明があったとおり、過去との比較を見るときに意味がある。また、改善するという視点で見ると、個別の評価に意味があるように感じられる。これらはどう使うかによるものである。

やはり、３つ目の「着眼点」について評価票の書き手側がどう思うかが心配である。全体をぼやかしているように思える。

岸担当課長）御指摘はよく分かるが、事務局としては、各施策評価票の全体を俯瞰して、記載の分かりやすさそのものに対して、一定の判定をしてもらうことが、我々が市民に説明していく上でのコミュニケーションツールとして重要な要素であるし、欠かせない「着眼点」であると考えている。今回はこの「着眼点」でやらせてもらいたい。もし課題が出てくるようであれば、見直すこととしたい。

高千穂委員長）昨年よりもより委員間のばらつきを減らし、かつ市民に分かりやすくしようという取組であって、これで全て問題なしとなることは、あまりないと思う。さきほどのコメント欄のところも含めてやってみて、見直すべきところは見直すということではどうか。

議事（４）その他（スケジュール等）

高千穂委員長）最後に全体をとおして、御質問、御意見等があればお願いしたい。

川崎委員）次回、全体のマニュアルの案ができ上がってくると思うが、そのマニュアルに基づいて、全員でシミュレーションできるような例を２つ出してもらえると、課題が見えてくると思う。マニュアルだけだと抽象的になってしまうので。

岸担当課長）了解した。

安陪委員）市民意見の募集について、今回やったような各区に出向いての説明を今後も続けてほしい。また各区で行われている、行事等も活用することで、より意見を集めることができると思う。

岸担当課長）区役所と連携しながら、周知徹底に努めていきたい。